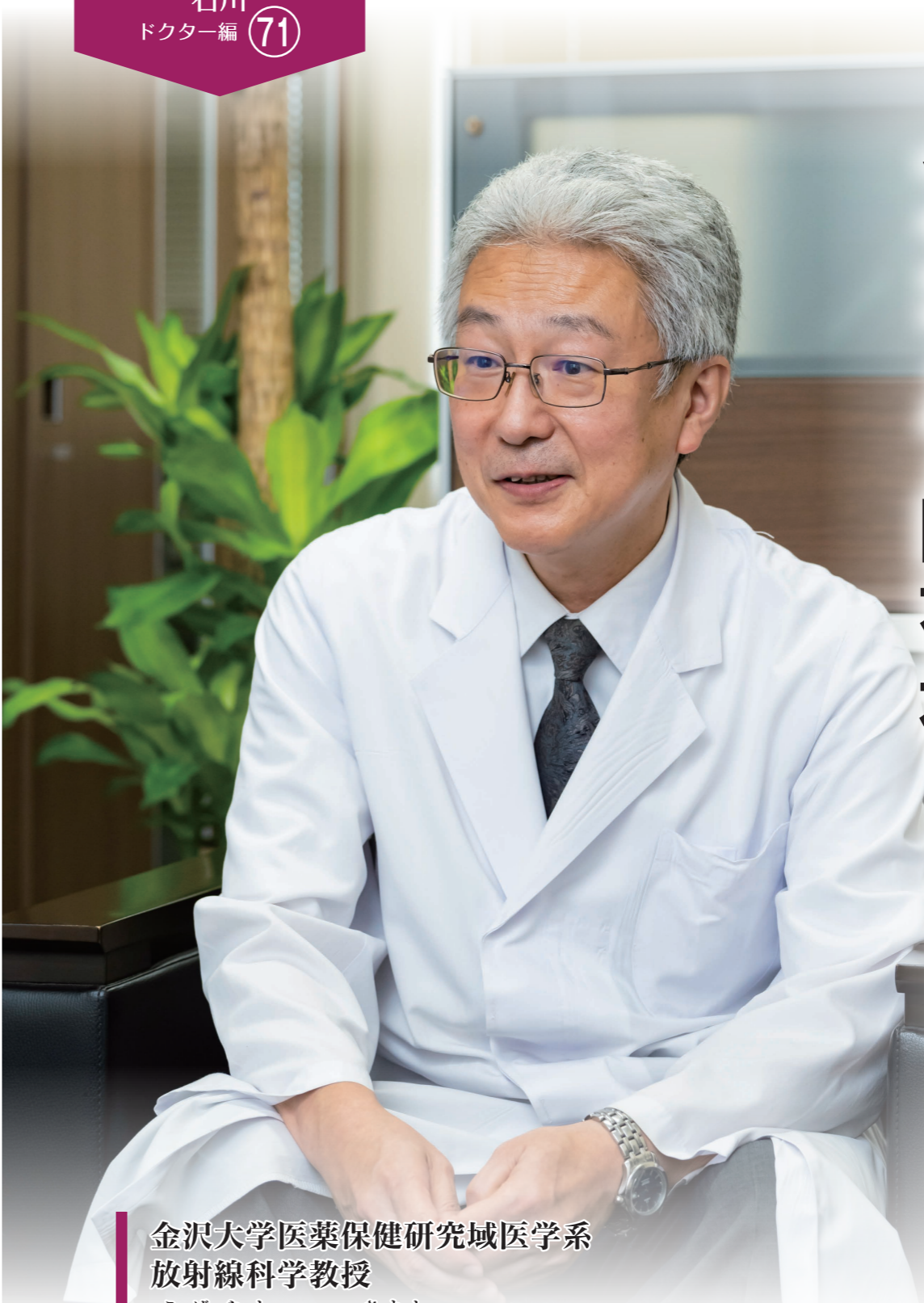


# 画像診断・IVR・放射線治療により 医療の質を支える インフラ的存在



金沢大学医薬保健研究域医学系  
放射線科学教授

こばやし さとし  
**小林 聡氏**

1990年 金沢大学医学部医学科 卒業  
1999年4月 金沢大学医学部放射線科助手(助教)  
2001年8月 MDアンダーソンがんセンター放射線科フェロー  
2011年4月 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科  
量子医療技術学講座准教授  
2013年 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科  
経血管診療学(放射線科)准教授

2015年 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科  
量子医療技術学講座教授  
2018年4月 金沢大学附属病院放射線部長兼任  
2023年6月 金沢大学医薬保健研究域医学系  
放射線科学教授

今年6月、金沢大学医薬保健研究域医学系放射線科学教授に就任した小林聡氏が放射線科の仕事、そして国際的レベルの教室について概説。放射線科医が診療科横断的に医療のクオリティを担保している、という認識を広めたいと語ります。

**様々な診療科を支援する、放射線科の三本柱**

放射線科の業務は主に、画像診断、IVR、放射線治療の3つからなります。画像診断は、CT、MRI、超音波などにより非侵襲的に生体を検査し、画像から病態を読み解きます。IVR(画像ガイド下治療)は、画像で病変を捉え、血管造影の技術などを用いて疾患を治療します。放射線治療は、体外または体内から放射線を照射し、主に悪性腫瘍の治療を行います。

例えば、肝臓の専門医が肝臓の画像を「異常なし」と判断しても、画像の端に写っている肺の一部に異常がある場合もあります。放射線科医が撮影された画像全体を幅広くチェックすることで、各ドクターの専門領域以外の異常が見逃される可能性を最小限にするダブルチェックの役目を果たしています。

本学の放射線科学教室は長年、肝癌や膵臓を研究テーマとし、私も肝胆膵を専門にしています。

第三代松井修教授は、肝細胞癌の早期診断法とIVRによる治療を研究し、当教室は世界のトップランナーとなりました。肝細胞癌では正常な肝臓より動脈血流が増えるため、造影剤投与によりCTやMRIで癌部分を可視化して診断することができま。また、癌細胞の栄

養血管に抗癌剤と塞栓物質を注入することで、癌細胞への栄養供給を断ち、壊死させることが可能です。さらに、研究を進展させ、画像データを用いて肝細胞癌の悪性度や再発リスクを判断する方法も見出しました。

**世界水準の環境下で放射線科医を育成**

画像診断機器の進歩は目覚ましく、1990年代、1時間に可能なCT検査数は2、3件程度でしたが、現在は10数件の検査が可能です。仕事量は格段に増えましたが、放射線診断医数は充分ではありません。北陸の放射線科医数は全国平均よりは多いですが、それでも検査機器台数に対し、不足しています。常勤の放射線科医が不在で大学から週2回ほど、病院へ医師を派遣したり、遠隔読影での診断を行っているのが現状です。北陸の各病院に放射線科医を常駐させることは、当教室の重要な使命です。

私は、松井修名誉教授、現病院長の蒲田敏文先生という肝胆膵のエキスパートとともに研究に取り組んだことで、「門前の小僧、習わぬ経を読む」ではありませんが、自然と確かな実力を身に付けることができました。金沢大学で学べたことは、私にとってこの上ない幸せです。私もまた、若手や中堅の医師とともに、国内トップレベルの臨床と研究を行うことで、優秀な放射線科医を育てたいと思います。



画像一枚一枚に対して、読影のポイントを示しながら、若手に指導を行う